

《資料1》 研修テキスト暫定版 目次

作成者

研究代表者 神尾 陽子 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所  
児童・思春期精神保健研究部

研究分担者 近藤 直司 大正大学 心理社会学部臨床心理学科

石飛 信 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所  
児童・思春期精神保健研究部

立花 良之 国立成育医療研究センターこころの診療部  
乳幼児メンタルヘルス診療科

永田 昌子 産業医科大学 産業医実務研修センター・産業医学

加茂 登志子 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所  
成人精神保健研究部

講義タイトル（案）（大項目）	講義のねらい（案）（全体の中に占める位置づけを明確化）	講義内容（案）（小項目）
<b>1. かかりつけ医の役割を認識していただくパート（かかりつけ医の発達障害臨床への参画の必要性を理解するために）</b>		
（仮）発達障害のある人の発達の道筋	本研修開始の経緯と目的、研修により解決を目指す課題を明確化し、多職種連携の中におけるかかりつけ医の役割を明確に打ち出し理解していただくことを狙う。このために、乳幼児期～老年期にいたるまでの発達障害のある人のQOLの向上に、早期支援が重要であることのエビデンスと、日本の現状での課題と取組の方向性を総説的に解説する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 発達障害の人と家族の生活を支える基本的な知識</li> <li>② 幼児期の重要性：早期の気づきと早期支援の意義と方法</li> <li>③ 健診情報、医療情報を支援に活用する方法と専門機関への時宜を得た適切な紹介に必要な知識</li> </ul>
（仮）発達障害者支援事業について	国としての発達障害に関する法整備・施策や支援事業の現状を理解して頂き、多職種連携の一員としてどのような役割が求められているかを理解してもらうことを狙う。	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 本講義のねらいと到達目標</li> <li>② （仮）改正 発達障害者支援法について</li> <li>③ （仮）障害者差別解消法について</li> <li>④ （仮）発達障害者への支援のための体制整備：全体像、施策の進捗状況、法制度における発達障害の位置づけ</li> <li>⑤ （仮）発達障害支援地域協議会について</li> <li>⑥ （仮）発達障害者支援センターについて</li> <li>⑦ （仮）発達障害関連事業の活用例の紹介（発達障害者に対する雇用支援策・ペアレントトレーニング事業・強度行動障害事業・警察・司法との連携・発達障害者地域生活安心サポーター など）</li> <li>⑧ （仮）自治体体制整備に関する好事例の紹介</li> </ul>

<p>(仮) 地域特性に応じた発達支援の在り方</p>	<p>本邦では、自治体ごとに支援のリソースや支援体制が異なるため、地域診断に基づいた各地域の状況に応じた役割をかかりつけ医が担うことの必要性を認識して頂くことを狙う。(かかりつけ医にわかりやすく伝えるために各地域の状況に応じた伝え方を各地域の研究担当者が再検討する必要はある。)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 本講義のねらいと到達目標</li> <li>② (仮) 地域における障害児支援の課題について</li> <li>③ (仮) 障害児支援に関する政策動向</li> <li>④ (仮) 障害児支援の原則</li> <li>⑤ (仮) 地域療育の位置づけ：過去と現在の比較</li> <li>⑥ (仮) 地域療育の直接支援機能と間接支援機能</li> <li>⑦ (仮) 地域診断の必要性と具体例（豊田市のシステム設計の紹介）</li> <li>⑧ (仮) 基礎自治体別にみた発達支援体制の支援実態と提言（小規模町村・中核市・政令市）</li> <li>⑨ 自治体特性に応じた支援システム設計（まとめ）</li> </ul>
<p>(仮) 発達障害のある人への多職種連携支援の構築～ネットワーク支援について</p>	<p>発達障害のある人への支援を行う上で、各々のニーズに応じた支援を行うためのネットワークの構築があらゆる発達段階で重要となる。このためには、かかりつけ医自身が自らの守備範囲を認識したうえで、地域で利用可能な支援リソースが何かを把握し、円滑な連携支援の一員として機能するためにどのような点に具体的に留意するべきかを知ることが重要となる。かかりつけ医、行政職にネットワーク支援の概念を学んでいただき、どのように連携支援に関与していけばよいかを具体例を通してわかりやすい形で認識してもらうことを狙う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 本講義のねらいと到達目標</li> <li>② (仮) ネットワーク支援の理解のしかた</li> <li>③ (仮) ネットワーク支援における留意点</li> <li>④ (仮) 有効なネットワーク支援に必要なこと（行政と関連するすべての専門職向け）</li> <li>⑤ (仮) ネットワーク支援の事例の紹介（かかりつけ医の関与する部分を中心に）</li> <li>⑥ (仮) ネットワーク支援の観点から地域の行政職にお願いしたいこと</li> <li>⑦ (仮) ネットワーク支援の観点から地域の精神科医にお願いしたいこと</li> <li>⑧ (仮) ネットワーク支援の観点からかかりつけ医にお願いしたいこと</li> </ul>

2. 発達障害の診断、治療・支援、連携に関する基本的知識を認識していただくパート（かかりつけ医が習得すべき知識について）		
<p>（仮）乳幼児の対人コミュニケーション行動のアセスメント</p>	<p>発達障害の早期発見・早期支援に関する正しいエビデンスと支援の現状を理解することにより、多職種連携の中で、かかりつけ医としての役割を認識していただき、早期支援（特に診断前支援）が円滑にすすむことを狙う。このために、標準化された ASD のスクリーニング手法（M-CHAT）と乳幼児期の ASD 児の行動の特徴についての理解を深め、かかりつけ医が一定の手順に則った ASD 早期評価を行うことの必要性和その方法を理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 本講義のねらいと到達目標</li> <li>② （仮）乳幼児期の対人コミュニケーション行動の発達</li> <li>③ （仮）乳幼児期の ASD 児の特徴</li> <li>④ （仮）対人コミュニケーション行動の弱さ・ASD の可能性への気づき</li> <li>⑤ （仮）気づき後の対応と支援につなげるための地域ネットワークの役割</li> <li>⑥ （仮）かかりつけ医にお願いしたいこと</li> </ul>
<p>（仮）ASD の併存症の評価と治療</p>	<p>ASD を有する人では、身体的、精神的併存症を高率に合併するため、ASD の人への支援において、併存症（身体・精神）への理解を深めることが支援に関わる全ての職種にとって重要である。特に、かかりつけ医は発達障害のある人の身体的治療を担う立場にあり、発達障害の特性を考慮した診察場面の設定や診察方法の工夫をする必要がある。本講義では、発達障害児・者に付随しやすい身体的問題や障害特性から考えられる診察上必要な工夫についての理解を深めることを通じて、かかりつけ医の発達障害臨床への</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 本講義のねらいと到達目標</li> <li>② ASD における併存症（身体的・精神的）の意義</li> <li>③ ASD に伴う身体的併存症</li> <li>④ ASD 特性から考えられる身体的問題への対応上の問題点</li> <li>⑤ かかりつけ医での ASD 特性を考慮した医療的対応上の留意点（自治体の取り組み紹介を含む）</li> <li>⑥ ASD の人への支援に向けてかかりつけ医にお願いしたいこと（身体的併存症について）</li> <li>⑦ ASD に伴う精神的併存症（総論）</li> <li>⑧ Challenging behavior について（具体例呈示も含め）</li> <li>⑨ ASD の人への支援に向けてかかりつけ医にお願いしたいこと（精神的併存症について）</li> </ul>

	<p>参画を促進することを狙う。また、精神科医等の多職種との連携のきっかけとなることが多い精神科的併存症の評価、治療（薬物療法を含む）についての知識を深め、かかりつけ医が留意するポイントを知って頂くことで、遅れない多職種連携によるメンタルケアが行われることを狙う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>⑩ ASDの人に対する薬物療法の原則</li> <li>⑪ ASDの薬物療法を巡る本邦の現状</li> <li>⑫ ASDの人への薬物療法の実施手順（ASDの薬物療法ガイドライン）</li> <li>⑬ ASDの人への支援に向けてかかりつけ医にお願いしたいこと（ASDの薬物療法について）</li> </ul>
<p>（仮）ADHDの評価と治療</p>	<p>ADHDの診断や治療に関する基礎的知識とスキルについての理解を深め、ライフステージを通じたADHDを有する人への支援の中でかかりつけ医に期待される役割とそれを遂行する上で留意点をかかりつけ医にわかりやすい形で理解して頂き、遅れない多職種連携支援が行われることを狙う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 本講義のねらいと到達目標</li> <li>② （仮）ADHDの診断や治療に関する基礎的知識・疾患概念・疫学・診断基準・評価のポイント（子ども・大人別）・評価手法（評価尺度や構造化面接ツール（DIVAなど）・治療総論</li> <li>③ （仮）かかりつけ医がADHDを疑うポイント（例：かかりつけ医がADHDの可能性に気付くポイントは何か？）</li> <li>④ （仮）かかりつけ医が疑った場合の初期対応と地域ネットワークにおいて期待される役割（例：かかりつけ医と児童精神科・小児神経科など専門医との役割分担など）（例：かかりつけ医がADHDを疑った場合にどのような問診を行えばよいか？専門医に紹介が必要なのはどのようなケースか？）</li> </ul>

		<p>⑤ かかりつけ医にお願いしたいこと  (例：かかりつけ医が ADHD の患者や家族に対する対応についての注意点は？かかりつけ医から専門医に ADHD が疑われる人を紹介する際の留意点は？)</p>
<p>(仮) 発達障害のある人の安定就労に向けて～産業医に期待されること</p>	<p>発達障害のある人の安定就労に向けて、身近な相談相手となる産業医の役割は大きく、障害特性に応じた助言や多職種（精神科医など）との連携など多様な業務が求められる。産業医が発達障害のある人の就労支援を行う上で留意すべき点や多職種連携の中で期待される役割をわかりやすい形で産業医に理解して頂くことを狙う。</p>	<p>① 本講義のねらいと到達目標  ② (仮) 発達障害のある人（強く疑われる人も含む）に起きる就労上の問題と産業医が扱う相談内容について  ③ (仮) 産業医からみた発達障害のある人が継続して働いていくために必要な要素  ④ (仮) 産業医が発達障害のある人に行える支援と出来ない支援：「(参考) ASD を有する労働者の支援に関する情報」  ⑤ (仮) 発達障害のある人の安定就労に向けて産業医にお願いしたいこと  ⑥ (仮) 発達障害のある人の安定就労に向けて地域の精神科医にお願いしたいこと  ⑦ (仮) 事例紹介（発達障害のある人への産業医の対応事例）</p>

<p>(仮) 発達障害のある人の就労支援</p>	<p>発達障害のある人の就労支援の現状や就労支援を行う上での現状での問題点を知ってもらい、多職種連携が求められる就労支援においてかかりつけ医に知ってほしい留意点や果たすべき多職種連携内の役割をかかりつけ医にわかりやすい形で理解して頂くことを狙う</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 本講義のねらいと到達目標</li> <li>② (仮) 発達障害のある人の就労上の課題について</li> <li>③ (仮) 発達障害の人の退職に理由について (職業適性やハードスキル/ソフトスキルの解説を踏まえ)</li> <li>④ (仮) 発達障害の人の就労に必要な支援について (発達障害の人におけるライフスキル支援とは)</li> <li>⑤ (仮) 事例の紹介：DVD「発達障害の人のライフスキル支援」</li> <li>⑥ (仮) 発達障害の人の安定就労にむけてかかりつけ医に望むこと</li> <li>⑦ (仮) 発達障害の人の安定就労にむけて専門医に望むこと</li> </ul>
<p>(仮) 発達障害、精神疾患のある児童に対する今日の教育的支援の現状と問題点～医療と教育の連携に向けて</p>	<p>発達障害や精神疾患のある児への教育現場での支援の現状や問題点、教育に関わる法制度についてかかりつけ医に理解してもらい、教育と医療の連携においてかかりつけ医に期待される役割をかかりつけ医にわかりやすい形で、理解して頂くことを狙う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 本講義のねらいと到達目標</li> <li>② (仮) 発達障害 (精神疾患含む) のある児童生徒の教育の現状と課題</li> <li>③ (仮) 学校教育法のもとでの発達障害 (精神疾患含む) のある児童生徒の学校現場での処遇</li> <li>④ (仮) 医療と教育の連携においてかかりつけ医にお願いしたいこと</li> <li>⑤ (仮) 医療と教育の連携において精神科医にお願いしたいこと</li> </ul>

<p>(仮) 発達障害児の親支援と早期発達支援の現状</p>	<p>ペアレントトレーニング・ペアレントメンター事業などの家族支援の現状と、子どもへの早期発達支援の現状をかかりつけ医に理解してもらい、親御さんの心情と子どもの発達を理解したうえでかかりつけ医がどういう役割を多職種連携の一員として果たすべきかをかかりつけ医にわかりやすい形で、理解して頂くことを狙う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 本講義のねらいと到達目標</li> <li>② (仮) 家族(親)支援の必要性・意義・実態(総論)</li> <li>③ (仮) 親支援1: 気づきの段階での支援(親の心理)</li> <li>④ (仮) 親支援2: 診断前後の支援(障害受容、ペアレント・メンターによる活動の紹介)</li> <li>⑤ (仮) 親支援3: 障害特性の理解に基づく具体的支援(ペアレント・トレーニングの紹介)</li> <li>⑥ (仮) 親支援4: 就学に対する支援(就学相談)</li> <li>⑦ (仮) 親支援を有意義なものにするためにかかりつけ医にお願いしたいこと</li> <li>⑧ (仮) 早期発達支援1・療育の必要性・意義・実態(総論)</li> <li>⑨ (仮) 早期発達支援2・療育の具体的取り組み</li> <li>⑩ (仮) 早期発達支援3・療育中の子どもと家族を支えるためにかかりつけ医にお願いしたいこと</li> </ul>
--------------------------------	--	---



3. 好事例（自治体の取り組み等）紹介パート		
<p>鹿児島県の地域支援体制づくり ～地域支援機能のある 公的医療機関の取り組み～ 医療・保健・福祉・教育の連携体制づくり</p>	<p>全国のどの地域でも問題となっているであろう発達障害臨床に関わる問題点（特に多職種連携に関するもの）をどのようにクリアしたのかについての実例を共有し、今後各地域でどういった方策をとっていけばよいかの参考にしていただくことを狙う。かかりつけ医が発達障害臨床においてどう機能すればよいかについての示唆についてもお伝えする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 以前の鹿児島県のシステムの克服すべき問題点</li> <li>② 解決をめざしてのあらたなシステム構築の設計、実施まで</li> <li>③ 実際の具体的な実践活動</li> <li>④ 何が変わったか。今後の課題など。（紹介システム・アウトリーチ活動（研修、情報発信、離島支援））</li> </ul>
<p>ふくいっこ、『みんな違ってみんないい』応援プロジェクト</p>	<p>全国のどの地域でも問題となっているであろう発達障害臨床に関わる問題点（特に多職種連携に関するもの）をどのようにクリアしたのかについての実例を共有し、今後各地域でどういった方策をとっていけばよいかの参考にしていただくことを狙う。かかりつけ医が発達障害臨床においてどう機能すればよいかについての示唆についてもお伝えする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 以前の福井県のシステムの克服すべき問題点</li> <li>② 解決をめざしてのあらたなシステム構築の設計、実施まで</li> <li>③ 実際の具体的な実践活動</li> <li>④ 何が変わったか。今後の課題など（ふくいっ子ファイルの取組など）</li> </ul>
<p>札幌市での児童思春期精神科医療の地域医療の向上への取り組みの現状（さっぽろ子どもの心の診療ネットワーク事業について）</p>	<p>全国のどの地域でも問題となっているであろう発達障害臨床に関わる問題点（特に多職種連携に関するもの）をどのようにクリアしたのかについての実例を共有し、今後各地域でどういった方策をとっていけばよいかの参考にし</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 以前の札幌市のシステムの克服すべき問題点</li> <li>② 解決をめざしてのあらたなシステム構築の設計、実施まで</li> <li>③ 実際の具体的な実践活動</li> <li>④ 何が変わったか。今後の課題など。（さっぽろ子どもの心の診療ネットワーク事業（さっぽろ子どものこ</li> </ul>

	<p>ていただくことを狙う。かかりつけ医が発達障害臨床においてどう機能すればよいかについての示唆についてもお伝えする。</p>	<p>ころの連携チーム事業・さっぽろ子どものこころのコンシェルジュ事業) など)</p>
<p>内灘町における発達障害児支援の取組み ～就学までの包括支援体制づくり～</p>	<p>全国のどの地域でも問題となっているであろう発達障害臨床に関わる問題点（特に多職種連携に関するもの）をどのようにクリアしたのかについての実例を共有し、今後各地域でどういった方策をとっていけばよいかの参考にさせていただくことを狙う。かかりつけ医が発達障害臨床においてどう機能すればよいかについての示唆についてもお伝えする。</p>	<p>① 以前の内灘町のシステムの克服すべき問題点  ② 解決をめざしてのあらたなシステム構築の設計、実施まで  ③ 実際の具体的な実践活動  ④ 何が変化したか。今後の課題など。(健診事業(1歳半、3歳、5歳児健診) など)</p>